



注文の多い料理店（II）

「どうもそうらしい。決してご遠慮はありませんというのはその意味だ。」

二人は戸を押して、なかへ入りました。そこはすぐ廊下になっていました。その硝子戸の裏側には、金文字でこうなっていました。

「ことに肥ったお方や若いお方は、大歓迎いたします」

二人は大歓迎というので、もう



注文の多い料理店（12）

大よろこびです。

「君、ぼくらは大歓迎にあたって
いるのだ。」

「ぼくらは両方兼ねてるから」

ずんずん廊下を進んで行きます
と、こんどは水いろのペンキ塗り
の扉がありました。

うち
「どうも変な家だ。どうしてこん
なにたくさん戸があるのだろう。」

「これはロシア式だ。寒いとこや



注文の多い料理店（13）

山の中はみんなこうさ。」

そして二人はその扉をあけようとしますと、上に黄いろな字でこう書いてありました。

「当軒は注文の多い料理店ですか

らどうかそこはご承知ください」

「なかなかはやってるんだ。こんな山の中で。」

「それあそуд。見たまえ、東京の大きな料理屋だって大通りに



注文の多い料理店（14）

はすくないだろう」

二人は云いながら、その扉を開きました。するとその裏側に、「注文はずいぶん多いでしようがどうか一々こらえて下さい。」

「これはぜんたいどういうんだ。」ひとりの紳士は顔をしかめました。「うん、これはきっと注文があまり多くて支度が手間取るけれどもごめん下さいと斯ういうことだ。」



注文の多い料理店（15）

「そうだろう。早くどこか室の中
にはいりたいもんだな。」

「そしてテーブルに座りたいもん
だな。」

ところがどうもうるさいこと
は、また扉が一つありました。
そしてそのわきに鏡がかかって、
その下には長い柄のついたブラシ
が置いてあったのです。

つづく